

静寂が広がる深夜、憂いを帯びた月光が淡く照らす石畳の回路では、身を潜めるように向かい合う二つの影が浮かび上がっていた。

「俺は出ていく…おまんも、早よ準備しねま」

額に零れ落ちてくる銀髪を、手櫛で軽く掻き上げるオランダが、静かに正面を見据える先には、肩まで伸ばした金髪を震わせる女性がいた。

小刻みに震え続ける指先を、抑え込むように強く握りしめたベルギーは、毅然に見つめ返していく。

「ウチは、残る」

臆する事なく強い眼差しを向けてくるベルギーに、怪訝そうに眉間に皺を寄せたオランダは、嫌悪感を露わにさせた。

今まで、付き従ってきた者から、無情にも断ち切られるとは、思いたくなかったオランダは、落胆を隠せずにいた。

悲嘆と哀愁が入り乱れる心情を、苦々しい溜め息だけで抑え込んだオランダは、静かに目を伏せると、胸の内を切り替えていく。

それは、こんな展開になる危惧が、絶えず頭の隅にあつたからだった。

いつまでも、幼くて危なっかしいと思っっているのはオランダだけであり、今では自分なんかよりも立場を確立しているベルギーを、改めて見つめ返していく。

王国として、立派な淑女へ育ちつつある事を誇りに思うと同時に、それが自分の力ではない事が苛立ちに変わる。

だからこそ、名残惜しそうに躊躇いつつも、守るばかりだった妹を手放す決意をせざるを得ない。

重苦しい嘆息を吐き出しながら背を向けたオランダは、そのまま一人で立ち去ろうとしたが、不意に思い出したように振り返ってきた。

「そくや、入れ込むのも、程々にしとけや」

何気なく放った言葉に、それまで頑なだったベルギーの頬が、一瞬にして朱色に染まっていく。

「なつ、なんやの急に…そんなんと、ちゃうー」

自分の意思とは裏腹に急上昇する体温を隠そうと、顔ごと目を逸らすベルギーだったが、それを静かに眺めていたオランダは、それさえも嘲笑うように冷淡に吐き出していた。

「アイツのホンマの怖さは、おまんも、よく分かかってんやざ？」

それだけの言葉でも、否応なく脳裏に浮かび上がる姿に、身を震え上がらせたベルギーは、己を守るように両腕で自身を抱え込んでいく。

耳が痛くなる程の静寂が戻ってくる中、オランダは興味が失せたように目を眇めた。

冷やかな目で射抜かれた途端、更に悪寒が増幅したベルギーは、凍りついていくのが、身体なのか、心なのかも分からなくなる。

衣擦れの音さえ拒むような重苦しい沈黙が漂う中、緩々と顔

を上げたベルギーは、数分前まで赤く染まっていた頬が、見る影もなく青ざめていた。

「分かつとるよ…だから、なんやの？」

自嘲にも聞こえる言動に、苦い溜め息を吐き出したオランダは、救いようがないと言いたげに首を振ると、緩やかな仕草で背を向けていく。

緩やかに遠ざかっていく背中を、心痛な瞳で眺めていたベルギーは、徐々に視界が霞んでいく事に気づいた。

長い間、一緒にいた兄が去つていく姿は、半身を削ぎ落されていくような感覚に陥る。

それでも、縫い付けられたように、その場から動けなかったベルギーは、零れ落ちていく涙を拭いてもせずに、一点だけを見つめ続けていた。

静かに距離を広げていく背中には、一度も振り返る事もなかった。

完全に姿が見えなくなつた頃、沈痛な溜め息を吐き出したベルギーは、小刻みに震える足を叱咤しながら踵を返した。